

ルイス・キャロルの世界 (3)

—アリスのための物語について—

笠井勝子

ルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」は、不思議の国のできごととして、ことばの意外さを繰り広げる。これは架空の物語でありながら、そのところどころには、実の世界が顔を出している。例えば、あの Twinkle, twinkle, little bat は、チャールズ・ドジスの昔の恩師、のちの友人バーソロミュー・プライス教授が仲間の間では、Bat で通っていたことと、さらにこの人が星の観測を趣味にしていたことに掛けて、星を bat に読み替えたのである。これは「アリスの物語」が、ルイス・キャロル、というよりもクライスト・チャーチのチャールズ・ラトウィジ・ドジスンと、「ドジスンさん」に話を頼んだ三人の子どもたちが共有した、実の世界を、下敷にしている部分があるということで、以下は、そのような基にある事柄を、ふたつの猫、ものいう魚、侯爵夫人の台所、癒しの池、アングロ・サクソン流、について調べ集めてみた。

ロリーナ、アリス、イーデイス、三人のリデル姉妹がクライスト・チャーチの學寮長館に越してきたのは1856年、この時アリスは4才であった。父親は、ヘンリー・ジョージ・リデル、ギリシャ語・英語辞典を出した著名なギリシャ語学者で學寮長館の改修した階段はこの辞典の収益で支払ったため、子供たちはこれを the Lexicon Stairs と呼んでいた。チャールズ・ドジスンの場合のように學寮の中に部屋を貰って住むためには、聖職の資格を獲ることのほかに、独身が条件の一つであったから、家族、それも幼い子どもたちが、學寮の構内に暮らすことは滅多にないことであった。父リデルは当時の親としてはリベラルに、子供た

ちがこの学者、聖職者が教え、学び、交流する、恵まれた環境の中で知的好奇心を満足させることを喜んでいた。學寮長館では、お客があればこどもたちは子供部屋に追いやられる、というヴィクトリア朝のしきたりにとらわれることなく、父の著名な友人、同僚に交じって音楽を聞き、室内の遊びの中に入れてもらえるのであった。のちに、「不思議の国のアリス」となる物語がうまれるきっかけとなったこのこどもたちが、ただふつうの可愛いおんなの子というだけのことであったら、この話は生まれなかったであろう。アリス・リデルは、利発で好奇心に輝いた目をしていた。

父リデルがその辞典を出したオックスフォード大学出版社、リデルが館長を務めた大学図書館、それに大学博物館、美術館で、リデルのこどもたちはいつも可愛いお客さまとして迎えられた。學寮長としてのリデルは、改革と発展を手懸けて、1860年代のオックスフォードを活気にあふれる学問と啓蒙の地とした。施設の拡張と充実にも着手する。珍しいもののいっぱい詰まった大学博物館もそのひとつである。剥製のコーナーには、絶滅した鳥、Dodo の骨の一部とジョン・セイヴァリが1651年に描いた鳥の絵がある。

「不思議の国のアリス」の原型が初めてことばになった1858年7月の日、それはボートに乗ってピクニックに出掛けた時に、せがまれてドジスンが語ったもので、リデルの子供たちにじゅうぶん馴染みのものをつぎつぎに織り込んだ内輪のお話であった。内輪であるから、自分たちだけに通用する、自分たちの身近なできごとを取り上げる。話の中には、そこに居合わせたものがでてくる。リデルのこどもたち、ロリーナがインコのロリー、イーディスが驚の子イーグレット、また、ボートの漕ぎ手にと、誘って行った友達のだックワスは、あひるのだック、そしてドジスン自身は大学博物館の絵で知っている鳥のドードーになった。いずれも鳥の名前で、その中のドジスンを表わすドードー鳥は、食べる癖のあった

ドジスンが自分の名まえをつかえていうところからきているという説もある。しかし、そうとは思われない。ドジスンは人の名前の綴り字をいろいろに組み替えて、たとえばアリスの綴り字 Alice を組み替えて Lacie の名前を、姉ロリーナが、Lorina Charlotte だったので、その頭文字の L と C から Elsie を作ったり、あるいは、「鏡の国」の最後の詩のように行頭にアリスのフルネーム Alice Liddell を織り込んだりする。Dodo の名前も自分の名前の頭の部分をとり、重ねたのである。吃ってつかえるから Dodo、という説明は、ドジスンについての次のエピソードを見ると、いささか繊細を欠くように思われる。アイサ・ボウマンの思い出の中に、退屈紛れにドジスンのマンガを描いていたら、それを見るや、取り上げて緩炉の火に入れてしまった、という話がある。どんなに幼くて、どんなに可愛いと思っている者でも、自分に対するこのようなからかいの態度を、笑って済ませるということはできなかった。したがってリデルの三人の子どもたちが、あるいはドジスンの吃るくせを真似して、Do-do-do-do-Dodgson とやっていたとしても、そのために、話の中でドジスンが自分をドードー鳥にするとは思われない。

「不思議の国」でひとりきりになり退屈すると、アリスはダイナーを思出す。あるいは、大きくなったアリスを怪物扱いして、動物たちで家に火をつけようかという相談がはじまると、「ダイナーをけしかけるからね」と、脅す。猫のダイナーは、アリス・リデルが可愛がっていた猫の名前である。

こどもと一緒にいる時がこの上なく楽しいドジスン。それも天真爛漫で、おとなの目、社交の儀礼をまだ意識していない時期のこどもの心に、そのまま溶けこむことのできたドジスン。ドジスンの手紙には、お茶や食事に誘う時、よく出てくることばが tête-a-tête。社交のためのお付き合いや会話が苦手で、晩年にはすべて断っていたのであるが、この1対1でお茶に招いて話をすることは、膝が痛んだり、風邪で寝ているの

でもなければ、年をとっても苦にならないのであった。彼がこの tête-a-tête にこだわっているのは、ひとりの相手に対して、通りいっぺんではない、固有のものを実に大切にしていたからである。十人でお茶を飲んだからといって、ひとりひとりが疎外されていると感じるひとはいないであろう。逆に1対1のもてなしでは却って疲れるというひともいるであろう。しかし、ドジスンにとっては、ひとりひとりにぴったり合った対応こそ楽しいものであり、楽しめるものであった。

ドジスはアリス・リデルの身近のことがら、リデル姉妹がその頃に見聞きした事柄を、さまざまに織り込むことと、ことばの世界でたのしむ彼の才能とを組合せた。お話の世界は、現実と虚構を綯い交ぜにして、それを承知の上であそび、虚構の中に現実が顔を出す。しかも自分の生活の一部が、となれば、それはドジスのアリス・リデルに対するまさに特別な tête-a-tête のもてなしである。猫のダイナーもそのひとつである。もともとはロリーナの猫であったのをアリスがもらって特に可愛がった猫であった。

そして、「不思議の国」には、もうひとつの猫がいる。イギリス人の諺の猫、それも「不思議の国」で名を上げて、その姿かたちを広く知られるようになった猫、Cheshire Cat。'To grin like a Cheshire Cat' は、わけのわからない笑いを浮かべることをさすが、実際の Cheshire Cat は何かといえば、チェシャー・チーズが昔、猫の形に成形してあったところからきているという説や、標識板に目印として描いてあったライオンの情けない姿のことであるという説、チェシャー州のグロウヴナー家の紋章のライオンを指しているという説がある。チェシャー州は、またドジスの生まれた土地でもある。彼は1832年チェシャー州ダーズバリに生まれ、11才の年までそこで過ごした。

18世紀にはじまったということわざの猫に、不滅の姿かたちを創り出したのは、ドジスの想像とジョン・テニエルの挿し絵であった。

姿が見えなくなる時は、しっぽの先から消えはじめ、最後まで残って見えているのが、宙に浮かぶニヤリとした口元。言われたとおり、文字どおりやって、残った結果である。というのは、木の枝にうずくまる大きな猫が、突然出たり消えたりすれば度胆をぬかれる。そこで「そんなにパッと出たり消えたりしないでちょうだい」とアリスに言われて、それならと、ゆっくり時間をかけて消えていった。こうしておしまいで、猫のいた場所に見えているのが、諺にあるにやりとした口元、というのであるから、小さなアリスでなくても、まことに楽しめる。

この話の出版を奨められた時ドジスは、これが他の人にも読んで楽しい本になるとは思いもよらず、手書きの本を作家のジョージ・マクドナルドに送って、彼の子供達の反応を聞かせてくれ、と頼んでいる。それだけにこの物語は、内輪のエピソードで構成されていたと考えてよい。ドジスの予期しないほどに、こどもたちに歓迎され、さらにおとなさえ夢中になって読み通したという。D. G. ロセティは、朝、郵便で受け取った本を寝床の中で開けてみて、そのまま読み終わるまでは、家の者たちに怒鳴られようと、愛想をつかされようと、床の中から動かなかったほどだと書いている。

Cheshire Catのほかにも、ドジスのことばとテニエルの絵によって世に送り出されたものがある。Turtle soupの代用品、mock turtle soupの材料になる動物、mock turtleを考えついた。Mock turtle soupの素は小牛の頭と肉であるところから、mock turtleの挿し絵は、亀の甲羅に小牛の頭と足を付けている。

女王さまからクロケーの招待状をもって来た使いの者は、自分の体程もある大きな書状を取り出して渡しながら厳かな声で挨拶する。'For the Duchess. An invitation from the Queen to play croquet.' このお仕着せを付けた使いの者は、髪粉をふった巻き毛の頭をして、大きく口を開いてものを言う魚の顔になっている。どうして魚か。1863年4月に、オ

クスフォードへあざらしを訓練して見せ物が来た。その呼び込みのチラシを見ると、大きく TALKING FISH!!! ものを言う魚、と書いてある。この宣伝文句は、リデルのこどもたちの好奇心をさらったのにちがいない。ドジスンがリデル姉妹に、話をしてやったボート遊びのピクニックは、このチラシよりさらに一年前の、1862年7月4日であった。したがって、ドジスンがアリス・リデルに手書きして贈った最初の本 *Alice's Adventures under Ground* にはまだ、このものを言う魚の話は、入っていない。

オクスフォード、とりわけリデルのこどもたちとドジスンに馴染みの深いクライスト・チャーチの生活が、「不思議の国」の中にところどころ顔を出している。クロケーの招待状が届いた侯爵夫人の家は、玄関を入るとすぐに大きな台所がある。中は煙が立ち籠めて、料理人のかき混ぜるスープには胡椒がたっぷり入っているのか、そこにいるものはみな、くしゃみが止まらない。この光景は、オーガスタス・ピュージンの絵 (*History of Oxford* 1814年) に描かれたクライスト・チャーチの學寮調理場に似ている。その絵で見ると調理場の其処此処には、煙がもうもうと高い天井へ立ちのぼり、十数名の男女が支度にとりかかっている大きな台所の様子がわかる。

また、オクスフォードの守護聖人にまつわる話は、「おかしなティーパーティ」に出てくる。この席には、帽子屋と兎の間に挟まれて、押しつぶされそうにしてやまねが座っている。やまねは、ベットに飼われる動物で、寒い時は冬眠状態になるために、この習性がお茶の席でもそのまま出てきて、なかなか目を醒ましていられない。やっと、わずかに目が醒めた間に、井戸の中に住んでいたという三人の姉妹について、やまねとアリスは次のようなやりとりをする。

'Once upon a time there were three little sisters, and they lived at the bottom of a well'

'What did they live on?'

'They lived on treacle.'

'They couldn't have done that, you know, they'd have been ill.'

'So they were,' said the Dormouse; 'very ill.'

'Why did they live at the bottom of a well?'

'It was a treacle-well.....'

Treacle-well には、18世紀初め頃まで使われていた「癒しの池」の意味がある。オクスフォードに近く Binsey というところには、the Binsey Treacle well という、中世には巡礼地になっていた「癒しの池」があった。同じ意味の treacle は、マイルズ・カヴァデイル訳の the Great Bible (1535年) のエレミヤ記の中に I am heuy and abashed, for there is no more Triacle at Galaad (8章22節) がある。この語は、毒を持つ動物に咬まれた時の解毒剤をさすギリシャ語 theriake に由来し、沈痛剤の一種で、解毒や悪病に薬効のある調合剤のことであった。しかし、この意味で使われたのは1804年の Medical Journal 12号の His antivenereal treacle, well-known for curing the venereal disease, rheumatism, scurvy, old-standing sores. を最後に N.E.D. では、obsolete の印がついている。ついでながら、カヴァデイルの the Great Bible のほかにも、1568年の the Bishops' Bible がエレミヤ記の同じ箇所でも treacle を使っている。そこは、Is there no tyracle in Gilead? これを、聖書の誤訳、珍訳に付ける俗称で、the Treacle Bible 「糖蜜聖書」と呼ぶことがあるが、それも元はといえば、この語が持っていた「解毒、悪病を癒す薬」の意味が、今日廃れてしまったのが原因で、16世紀の聖書翻訳者には気の毒な結果となった。

The Binsey Treacle Well については、クライスト・チャーチのラテン語礼拝堂に取り付けられたガラス絵の一枚に、守護聖女フリダスウィーダとその功德による「癒しの池」に集まる巡礼が描かれている。

ラファエル前派のバーンジョウンズが1859年に制作したもので、聖女の方に、歩けない老人や病人、こどもを差し出しているようすは、ベテスダの池の水が動くのを待っている足の萎えた男とイエスの話を思い出させる。フリダスウィーダはサクソンの時代の姫君で、オクスフォードの守護聖人になっている。この聖人にまつわる話を子供の頃から聞いていたアリス・リデルは、のちにフリダスウィーダを記念する教会が建てられた時(1888年)、テムズ川を小舟に乗って初めてその地にたどりついた聖女の姿を、木のパネルに彫り上げて、それは教会入り口のドアの上にはめこまれた。

やまねの話の中で Treacle に二重の意味を持たせることができたのも、この聖女の物語と the Binsey Treacle Well の話、そしてラテン語礼拝堂のガラス絵がそれぞれ、リデル姉妹には、身近な話題であったことによる。

引用した、やまねとアリスのやりとりの中で、

'They couldn't have done that, you know, they'd have been ill'

「そんなこと、やれっこないわ。だって、そんなことをしていたら、気持ちが悪くなっているでしょう」

は、treacle (糖蜜) で生きていた、という前の話についてである。その次に

'So they were,' said the Dormouse; 'very ill.'

「そうだった、重い病気にね」

ここの、illつまり病氣、がwellつまり回復、するように、treacle-wellつまり癒しの池、にwell-in、しっかりと中に入って、いる、となる。

そこで話は、井戸から水を汲む 'draw water out of water-well' の draw に掛けて、線描きの絵を習う 'they were learning to draw' へと移る。当時、アリス・リデルの絵を見ていた先生は、ジョン・ラスキン

であった。ドジスは、アリス・リデルが習っていた、週に一度の絵の勉強から、線画、スケッチ、油彩画、をもじって、引きずり、伸ばし、どくろを巻いて失神、を教える先生を、年寄のあなごにした。

the Drawling-master was old conger-eel, that used to come once a week: he taught us Drawling, Stretching, and Fainting in Coils.

アリス・リデルの絵の先生、ジョン・ラスキンは、サー・ヘンリ・アクランドとともに學寮長リデルの教え子で、ともに大学博物館計画に携わり、リデルの全面的な協力を得ていた。ところで、「不思議の国のアリス」の出版の話が出た頃ドジスは、少しレッスンを受ければ、自分の挿し絵が使えらるうと考えていた。ドジスの絵の腕前は *Alice's Adventures Underground* の挿し絵で、見るができる。

ドジスに絵を描くことを諦めさせたのは、ラスキンであった。*Alice's Adventures Underground* の絵は、ドジス自身の挿し絵である。自分の絵を諦めたドジスは、イーソップの挿し絵で動物画が評判になったテニエルにアリスの挿し絵を依頼した。

「鏡の国のアリス」に、ヘイヤーという使いの者がある。彼はアリスに言わせると、「跳びはねたり、身をよじったりしながら、両手を扇子のように広げて、とてもおかしな格好」でやってくる。そばにいた王さまは、わけを説明して、'He's an Anglo-Saxon Messenger and those are Anglo-Saxon attitudes.' と答えている。「アングロ・サクソン」が、こどもたちとどのように結びつくのであろうか。

オクスフォードの大学図書館、ボドリアン・ライブラリを訪ねた時に、リデルのこどもたちは、そこに展示してある古い写本の中に、紀元1000年頃のウェスト・サクソン方言で書かれたキャドモンの創世記の、挿し絵を覚えていた。「アングロ・サクソン流」を絵にしたテニエルの挿し絵では、このキャドモンの絵に倣って、使いのヘイヤーは両手を広げ、紐で提げた袋は、首にかけ、左手で袋の口を開けて、右手は、キャドモ

ンの絵では柄の長いシャベル状のものを持っているが、その代わりに左手の袋から取り出したハムサンドイッチを王さまの方に差出している。膝から下の気取った足の張り出し具合は、キャドモンの図をそのままに写している。

以上の例は、「アリスの物語」が、19世紀半ばのオクスフォード、クライスト・チャーチでの生活、そこで見聞きした事柄に基づいていることを示すものである。

参考書目

- The Letters of Lewis Carroll. 2 vols. ed.Morton N.Cohen. 1979.
The Annotated Alice・Lewis Carroll. ed.Martin Gardner. 1965.
Lewis Carroll. Derek Hudson. 1958.
Lewis Carroll. An illustrated biography. Derek Hudson. 1982.
Lewis Carroll As I Know Him. Isa Bowman. 1972.
Alice's Adventures in Oxford. Mavis Batey. 1980.
Dictionary of Anecdote, Incident, Illustrative Fact. Walter Baxendale.
1888.
英語の聖書 寺沢芳雄ほか。1969.